

## 主イエスを知るようになってからの心構え

2007. 1. 7 (日)

ベック兄メッセージ (メモ)

### 引用聖句

使徒の働き 16章6節から34節

それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、ブルギヤ・ガラテヤの地方を通った。こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。それでムシヤを通して、トロアスに下った。ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、「マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください。」と懇願するのであった。パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤへ出かけることにした。神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。そこで、私たちはトロアスから船に乗り、サモトラケに直航して、翌日ネアポリスに着いた。それからピリピに行ったが、ここはマケドニヤのこの地方第一の町で、植民都市であった。私たちはこの町に幾日か滞在した。安息日に、私たちは町の門を出て、祈り場があると思われた川岸に行き、そこに腰をおろして、集まった女たちに話した。テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。そして、彼女も、またその家族もバプテスマを受けたとき、彼女は、「私を主に忠実な者とお思いでしたら、どうか、私の家に来てお泊まりください。」と言って頼み、強いてそうさせた。私たちが祈り場に行く途中、占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った。この女は占いをして、主人たちに多くの利益を得させている者であった。彼女はパウロと私たちのあとについて来て、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです。」と叫び続けた。幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り返ってその霊に、「イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け。」と言った。すると即座に、霊は出て行った。彼女の主人たちは、もうける望みがなくなったのを見て、パウロとシラスを捕え、役人たちに訴えるため広場へ引き立てて行った。そして、ふたりを長官たちの前に引き出してこう言った。「この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。」群衆もふたりに反対して立ったので、長官たちは、ふたりの着物をはいでむちで打つように命じ、何度もむちで打たせてから、ふたりを牢に入れて、看守には嚴重に番をするように命じた。この命令を受けた看守は、ふたりを奥の牢に入れ、足に足かせを掛けた。真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。ところが突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みな鎖が解けてしまった。目をさました看守は、見ると、牢のとびらがあいているので、囚人たちが逃げってしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとした。そこでパウロは大声で、「自害してはいけない。私たちはみなここ

にいる。」と叫んだ。看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスとの前に震えながらひれ伏した。そして、ふたりを外に連れ出して「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」と言った。ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。そして、彼とその家の者全部に主のことばを語った。看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。そして、そのあとですぐ、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。

私たちは、どういう気持ちでこの新しい年を迎えるようになったのでしょうか。最も大切なことは、「後ろのものを忘れ、目標をみざして走ること」なのではないでしょうか。

今朝の題名の『主イエスを知るようになってからの心構え』とは、どういうものであるべきでしょうか。

パウロは、ピリピ書の中で証しました。「私は主イエス様によって捕えられた者として、必死になって走ります」と。ちょっと読んでみましょう。このピリピ人への手紙は、「喜びの文」と呼ばれています。しかし、彼のこの証しはローマの刑務所の中で書いたものなのです。

ピリピ人への手紙 3章12節

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。

「私は、勉強して納得させられてからイエス様を受け入れた」のではありません。「私は、キリスト・イエスによって捕えられてしまった」のです。これは、単なる恵みにすぎなかったのです。

ピリピ人への手紙 3章13節、14節

兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えるてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っているのです。

イエス様によって捕えられたパウロは、「目標をみざして一心に走る者」となったのです。

ピリピ人への手紙 3章15節から21節

ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう。もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてください。それはそれとして、私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなた

がたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。というのは、私はしばしばあなたがたに言ってきたし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

このような証しの手紙を読むと、刑務所の中にいるパウロが喜びに満たされていたことがわかるのです。この態度をとると、私たちもやはり喜びに満たされるのです。

一人の非常に悩んでいた奥さんが、ある日、「私は後ろ向きの生活をしたくない」と言ったのです。大切なのはそのことです。「前向きの生活」をすることです。

けれども、主の思いと私たち信じる者の思いとが、似ていれば幸いなことですけれど、あまり似ていないのではないのでしょうか。

イザヤ書 55章8節、9節

「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。— 主の御告げ。一天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」

全く違います。ではどうでしょうか。へブル書の著者は、当時の信じる者を励ましたのです。

へブル人への手紙 12章2節、3節

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

結局、「イエス様のことを考えなさい」。

元気になる薬とは、「イエス様を仰ぎ見ること」です。「イエス様から目を離さないこと」です。

何十年前だったか忘れましたが、フィンランドのヘルシンキで、オリンピックが開かれました。その時、ある女性が馬術で優勝し金メダルを取りました。その婦人は体の不自由な人でした。小さいときからの小児麻痺で手足が思うようにならなかったのですが、自分の体を打ち叩いて服従させ馬術を習ったそうです。そしてオリンピックの時も、自分で馬に乗ることができず人に乗せてもらったほどです。しかし見事に優勝しました。考えられないような素晴らしいことではないのでしょうか。

ところで、私たちは永遠の冠を目指し、この婦人のように目標を目指し、力を尽くして戦っているのでしょうか。パウロは当時の信じる者に書き記したのです。すなわち、コリント人への手紙・第一 9章25節

また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。

私たちは、彼らと違う目標を持っています。「そうすべきである」ではなくて、現在の問題として「そうします」。

パウロはまた、ピリピにいる兄弟姉妹に対して書き送りました。  
ピリピ人への手紙 3章17節

兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。

ピリピ人への手紙 3章13節、14節

兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えるとはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目指して一心に走っているのです。

ここで考えたいことがあります。今パウロが話しかけているピリピの教会は、どのようにしてできたのでしょうか。

パウロは、第二次伝道旅行はシラスという同労者と一緒に出かけたのです。途中でパウロとシラスに、テモテという若い兄弟が加わりました。三人は行く先々で、「イエス様は、すべての主である」ことを宣べ伝えたのです。三人には喜びもありましたし、悲しみもありました。

みことばを宣べ伝えていくところ、人々は必ず二つの群れに分かれていきます。一つは、みことばを素直に喜んで受け入れる人々。もう一つは、「結構です」。つまり、みことばに聞き従わず滅びに向かう人々です。

三人が伝道していくうちに、突然主から、「これ以上伝道の手を広げないように」という啓示を受けました。使徒行伝の16章をもう一度読んでみましょう。

使徒の働き 16章6節、7節

それから彼らは、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、ブルギヤ・ガラテヤの地方を通った。こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。

三人の思いと主の思いとは違ったからです。三人はそれまでビテニヤの地方に伝道の足を伸ばし、小アジヤ全体に福音を広めようと計画をしていたのです。そして、「この計画を祝福してください。主よ。お願いします」と祈り続けたに違いありません。

このような三人に対して主は、「わたしの思い、わたしの心はそこにはない」とお知らせになったのです。

エレミヤ書 29章11節

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。— 主の御告げ。—それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」

主のみわざは決して後ろへ退いて行きません。主はいつも積極的な道を開いてくださいます。一つの道がふさがれば、さらに良い祝福の道を備えてくださるのです。

パウロとシラスとテモテの三人は、自分の計画がみこころでないことを教えられたとき、主の御前に静まっていると主は新しい道を示されたのです。前に読みました使徒行伝16章です。

使徒の働き 16章9節、10節

ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニア人が彼の前に立って、「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください。」と懇願するのであった。パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアへ出かけることにした。神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。

「ただちに」です。

主が示された場所は、今までのアジアと違ってヨーロッパでした。その時まで、ヨーロッパで福音を聞いた人は一人もいなかったのです。そればかりではなく、主が示されたその場所は、のちに非常に祝福を受けた場所となったのです。

そこで救われた最初の方は、紫布の商人であるユダヤ人のルデヤという婦人でした。もちろん彼女だけではなく、全家族も導かれ、救われました。

後に導かれたのは、占いをする女奴隷でした。彼女はもちろんユダヤ人ではなくギリシヤ人でした。

その後導かれたのは、監獄の獄吏でした。もちろん彼だけではなく、家族みな一度に導かれ、救われたのです。この監獄の獄吏とはもちろんユダヤ人でもなく、ギリシヤ人でもなく、ローマ人でした。

ですから、ヨーロッパに建てあげられた最初の群れは、ユダヤ人とギリシヤ人とローマ人から成り立っていたわけです。

- ・主のからだなる教会は、世界的であり、そこには民族の差別は全くありません。
- ・主のからだなる教会は、天的であり、地的ではありません。「私たちの国籍は天国です」とパウロは言うことができたのです。
- ・主のからだなる教会は、御霊によって支配されているべきであり、人間の組織によって支配されていてよいものではありません。

パウロの手によって建てられていた数多くの教会の中で、このピリピの信じる者の群れが一番よい教会だったようです。パウロは彼らについて考えたとき、嬉しくなったのです。パウロの喜びの源でもありました。ピリピ人への手紙1章3節を読むと分かります。

ピリピ人への手紙 1章3節から5節

私は、あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝し、あなたがたすべてのために祈るごとに、いつも喜びをもって祈り、あなたがたが、最初の日から今日まで、福音を広めることにあずかって来たことを感謝しています。

「あなたがたすべて」です。「あなたがた大部分」ではありません。結局、彼らは初めから分かりました。「救われることとはすごい！素晴らしい！」と。けれど、ほかの救われていない人たちのために用いられなければ…。きっと主は悩んでいらっしやると思います。

先ほどいっしょに歌いました歌は、歌というよりも一つの祈りだったのではないのでしょうか。これこそ、私たちの毎日の祈りになれば素晴らしいのではないのでしょうか。ピリピにいる兄弟姉妹は、結局そういう心構えを持つようになったのです。

パウロは後に、あの小アジア全体に福音を宣べ伝える自分の計画を捨てて、「御霊の声に聞き従ったことがよかった！」と。主に感謝したに違いありません。もしパウロが自分の計画に従っていたなら、彼はどんなに大きな損失を招いていたか知れません。

私たちの中に、自分で思っている計画に対して道が閉ざされてしまっているような状態にある方々もいるかもしれません。主はそのような人たちに、ご自分の道を示そうと望んでおいでになります。

ピリピ書を読んでみると、パウロのピリピ人に対する愛がにじみ出ています。パウロはピリピにいる兄弟姉妹と深い心の交わりを持っていました。パウロは自分の胸の内を全部、ピリピの兄弟姉妹に打ち明けることができたのです。

パウロに愛されているピリピの信じる者の群れに、パウロの手紙が届きました。おそらく、一人が大きな声で読んだでしょう。ピリピの兄弟姉妹は、いっしょにこの手紙を開いて読み、また内容を吟味すると、パウロの決心のほどが3章の中に記されています。

ピリピ人への手紙 3章17節

兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。

ピリピ人への手紙 3章13節、14節

兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えるはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目標として一心に走っているのです。

これを読み、また聞いたピリピの信者たちも、パウロと同じ決意をもう一度新たにされたに違いありません。

パウロは、驚くほど霊的に高い人でした。それにも関わらず、パウロは、「前のものに向かって進み、目標を目標として一心に走っている」と言っています。

ピリピにいる兄弟姉妹は、パウロの目から見て模範的な信者でした。けれど、パウロは

なおそれに満足しなかったのです。「私にならう者になってほしい」と呼びかけています。パウロは霊的な人であり、ピリピの兄弟姉妹も模範的な人たちでした。それにも関わらず、「前のものを求めよ」と言うのですから、私たちもこれに深く心を留める必要があるのではないのでしょうか。

私たちが、あまり気に留めずに見過ごしにしている主の備え、また、与えたいと思われている主の報いとは、いったい何でしょうか。からだを伸ばして目標を目ざし走り抜いて行くときに備えられている報いとは、いったいどういうものなのでしょう。その報いは「単なる救い」ではありません。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」。確かにそうです。けれども、パウロもすでに救われていましたし、「救いの確信」を持っていました。すでにパウロは、「自分は永遠のいのちを持っている」ということを確信したのです。

このピリピ人への手紙を読むとわかります。

ピリピ人への手紙 1章21節

**私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。**

パウロは、自分の肉体が減びると、天の住みかに帰り、主イエス様とともに生きることができると、本当に楽しみにしていました。

ピリピ人への手紙 1章23節

**私は、その二つのもの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。**

パウロは、自分自身のことは少しも考えませんでした。自分のすべては主にあることを、よく知っていたからです。

ピリピ人への手紙 4章18節

**私は、すべての物を受けて、満ちあふれています。**

と、満ち足りたパウロの心が表わされています。刑務所の中のことばです。パウロは、「刑務所の中は本当にひどい。早く出られるように祈ってください」と書かなかったのです。

「私は、すべてのものを受けて、満ちあふれています」と証しています。

このようなパウロであるにも関わらず、なお目標を目ざして神の賞与を得ようと努めているのは、いったいどうしてでしょうか。不思議ではないのでしょうか。私たちが救いをいただくためにここで少し考えるべきことは何でしょうか。

すなわち、私たちは、

もうすでに永遠のいのちを持っているのでしょうか。

イエス様に個人的にお会いしているのでしょうか。

主のみことばは、「主イエス様をもつ者は永遠のいのちを持ち、主イエス様をもたない者は永遠のいのちをもっていない」と、聖書にはっきり語っているからです。

聖書の中で、イエス様は例えをもって救いの道を私たちに教えておられます。

すなわち、

- ・この世には二つの門がある。一つの門は広く、一つの門は狭い。
- ・また、この世には二つの道がある。一つの道は広く、一つの道は狭い。
- ・また、この世には二つの群れがある。一つの群れはたくさんの方がおり、もう一つの群れは少しの人しかいない。
- ・また、この世には二つの目標がある。一つは永遠の滅びであり、一つは永遠のいのちである。

このように、イエス様は全世界の人々を二つに分けておられます。主なる神は、私たちの心の深みを知っておいでになります。

主が私たちをご覧になるのと同じ目を持って、私たちも自分自身を見ることができたら、本当に幸いです。私たちの心の目を開いて自らを顧みるとき、主の前に自分のことがわかるようになります。

ローマ人への手紙の3章の内容は、だいたい旧約聖書から引用したものです。

ローマ人への手紙 3章10節後半から18節

「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。」  
「彼らののどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」  
「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」  
「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」  
「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲惨がある。また、彼らは平和の道を知らない。」  
「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」

この最後の文章は、一つのまとめです。主を畏れる恐れがなくてはならない。主に對する恐れがないなら、人間は自分勝手に行動するようになり、主は祝福することがおできなくなります。キリスト者に求められているのは、頭のよい人たちではありません。金持ちでもないし、権力を持つ人たちでもありません。

主はどのような人たちを求めておいでになるかと言いますと、結局、「心の砕かれた人たち、聖書のみことばにおののき、主を畏れる人たち」です。「砕かれている心」を持たない人は、祝福されません。みことばにおののかない人は、間違いなく不幸になります。主を畏れない人は、必然的に暗やみの中に住むようになり、孤独のかたまりになります。

アブラハムという男は、いったいどうしてあのように祝福されたのでしょうか。彼の告白、証しは素晴らしいです。「私は塵灰にすぎません」。もちろん彼はそう言っただけではいけません。本当にそう思ったのです。多くの方は、「私はやはり駄目、つまらない者です。云々」と言います。けれど、だいたいそう言っているだけで、そう思っていないのです。他人が同じことを言うと、あまりよい気持ちにならないのではないのでしょうか。

アブラハムは心から、「私は塵灰にすぎません。役に立たない。捨てられるべきです」と言いました。ですから、祝福されました。

ヨブという男は、「私は自らを恨み、塵灰の中で悔います」と言ったのです。

アサフという詩篇の作者は、「私は愚かで悟りがなく、あなたに対しては獣のようになって…」と告白していました。

塵と灰とは役に立たないものです。確かに捨てるべきものです。けれど、主は捨てようとなさいません。

主を畏れる兄弟姉妹は、へりくだって心砕かれた人たちです。そしてまた、主の光によって、「自分のみじめさとむなしさ」を知るようになった兄弟姉妹です。

パウロは、次のように書きました。

ガラテヤ人への手紙 5章19節から21節

**肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。**

とあります。私たちもへりくだり、全部主に話すなら、すべては新しくなります。

ダビデは自分のわがまま、自分のあやまちを告白した時、「赦された」という確信が与えられたのです。詩篇の32篇。よく知られている箇所ですが、1節から読みます。

詩篇 32篇1節から5節前半

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。

隠すことをやめたのです。

詩篇 32篇5節後半

私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

- ・イエス様は、いろいろな名前を持っておられます。一つの名前は「罪人の友」なのです。
- ・イエス様は、どんな人たちを受け入れてくださるのでしょうか。どのような罪人でも、みもとに来る人たちを拒まないで、喜んで受け入れてくださいます。
- ・イエス様は、どのようなお気持ちで受け入れてくださるのでしょうか。確かに、喜びをもって赦し、受け入れてくださいます。

パウロは、「見よ、今は恵みのとき、今は救いの日です」と。

永遠のいのちを持っているにも関わらず確信のない人は、今日でも静かにイエス様の前に、「イエス様、私には満足がありません。私は、永遠の世界に対してちょっと不安です。

私のあやまち、わがままは赦されていません。イエス様の血潮によって、私の罪を赦し、永遠のいのちをお与えになってください」と祈るなら、イエス様は心に語りかけてくださり、罪を赦し、ご自身の平安をもって臨んでくださるのです。そのとき、誰でも、新しいいのちを持って、生きがいのある人生を歩み出すことができるのです。

最後にもう一度、パウロの救いの体験について一箇所読みます。

テモテへの手紙・第一 1章12節、13節

私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。

「私はあわれみを受けた」と言える人は、本当に幸せです。

テモテへの手紙・第一 1章14節から17節

私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。

と、パウロは書き記したのです。彼の証しの内容はいつも、「主があわれんでくださらなければ、すべてはおしまい」でした。

主の恵みによって捕えられた者は、やはり走るべきです。周りの人たちの解放、また、救いのために戦い、祈り続けるべきです。

イエス様を知るようになってからの心構えとは、そういうものであるべきです。

了